

平成22年4月10日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720016
 研究課題名（和文） ドイツの生命倫理論議にみられるキリスト教ならびに同教会の果たす役割に関する研究
 研究課題名（英文） A study on the role of Christian beliefs and Christian churches in the bioethical discourse in Germany
 研究代表者
 バウアー トビアス（BAUER TOBIAS）
 熊本大学・文学部・准教授
 研究者番号：30398185

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトにおいて、生命倫理に関するドイツのキリスト教諸教会の基本的立場を分析し、最も基本的な見解の抄訳を作成した。それに基づき、「脳死・臓器移植」問題を一例とし、ドイツ・プロテスタント教会の立場や論証のあり方及び政治分野への影響を分析した。更に、本研究テーマに歴史的視点及び日独比較的視点を加え、本研究プロジェクトの今後の更なる展開の方向性の一つを提示した。

研究成果の概要（英文）：(1) Analysis and abridged translation of the most basic statement of the Christian churches in Germany on bioethical issues. (2) Exemplary analysis of the position of the Protestant Church in Germany on the problem of brain death and organ transplantation. (3) Examination of the historical background of Christian bioethics. (4) Proposal for a comparative approach to the problem of religious bioethics.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 500,000 | 0 | 500,000 |
| 2008年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 330,000 | 1,930,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、生命倫理、キリスト教、宗教と医療

1. 研究開始当初の背景

ドイツにおける生命倫理論議のあり方およびその動向は日本の生命倫理学によってすでに幅広く研究されている。一例を挙げれば、平

成14年文部省科学研究費補助金（基盤研究（B））「独仏を中心としたヨーロッパ生命倫理の全体像の解明とその批判的考察」（研究代表者：飯田亘之教授）という研究プロジェクトによって、ドイツ生命倫理の主要文献

の翻訳ならびに要約が発表されている。ドイツの倫理・哲学界の主要な研究者の論考も日本に紹介されており、またドイツの生命倫理論議の理解に際して重要だと思われる一次資料も日本語訳で提供されつつある（例えば、松田純監訳、『ドイツ連邦議会審議会答申：人間の尊厳と遺伝子情報』知泉書館、2004年）。しかし、従来日本で注目されてきたのは主にドイツの生命倫理についての政治論議及び哲学・倫理学の研究者の論拠であって、各論拠の根底にある思想としてのキリスト教、またキリスト教諸教会の立場およびその生命倫理論議と政治的な決定に及ぼすキリスト教の影響はまだ十分把握されていないのである。ドイツにおける生命倫理研究においても、主に聖書にみるキリスト教の死生観や人間観など、またキリスト教神学の宗教哲学的論拠は視点に入れられているが、キリスト教諸教会からの生命倫理諸問題に対する声明の影響、また政治分野における生命倫理論議の中のキリスト教的生命倫理の役割についての体系的な研究は稀である。したがって、本研究は、ドイツのキリスト教諸教会を生命倫理論議に取り組む社会的機関の一つとしてとらえ、述べられている論拠とその論議、また政策に及ぼす影響を検討し、ドイツの生命倫理論議におけるキリスト教の役割を明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

本研究課題の申請時における当初の研究目的は、下記の3点であった。

(1) ドイツのキリスト教諸教会の基本的な声明の和訳と分析：現在まで生命倫理に対する基本的な立場と方針を述べる声明である『神はいのちの友：生命の保護に際しての要

求と課題』(Kirchenamt der Evangelischen Kirche in Deutschland und Sekretariat der Deutschen Bischofskonferenz (Hrsg.), Gott ist ein Freund des Lebens: Herausforderung und Aufgaben beim Schutz des Lebens. Gütersloh, 1989.)の和訳を作成する。プロテスタント教会とドイツ司教会議事務局(ローマカトリック教会)が共同で編集したもののだが、ドイツのキリスト教各宗派のいくつかがそれに与しており、ドイツにおけるキリスト教の最も基本的なコンセンサスを表す共同見解である。本研究テーマに関する今後の研究にも不可欠と思われるその和訳に加え、その分析も行う。

(2) ドイツの生命倫理諸問題に対するキリスト教の立場の分析：『神はいのちの友』を基盤に、現在ドイツで議論されている生命倫理諸問題(例えば、遺伝子技術、脳死・臓器移植、肝細胞研究など)に関して公にされている見解にみる論拠を分析し、諸教会のコンセンサスのあり方、または異なる立場とその教義上の理由を明らかにする。キリスト教側によって挙げられている論拠を体系的に整理し、その分析を行う。

(3) 生命倫理論議におけるキリスト教の役割についての調査：キリスト教的生命倫理が、一般生命倫理論議または政治分野に及ぼす影響と役割を明らかにする。具体的に、教会の代表者と神学者、または政治家、新聞記者、福祉団体の代表者などが、政治分野と一般論議に影響を及ぼすために使用している手段についても調査する。それに加え、キリスト教側から唱道された信念と政策がどの程度まで認められ、政治論議に考慮されているのかという点も明らかにする。また、従来の日独の研究成果を踏まえながら、キリスト教側が生

命倫理論議に持ち込んだ論拠に対する一般社会の反応もメディア調査などによって明確にする。

3. 研究の方法

(1) 平成19年度

文献調査：まず徹底かつ体系的な文献調査を行い、一次資料（キリスト教諸教会の生命倫理関係の見解・声明など）また日本語・西欧語の二次文献と参考文献を集めた。生命倫理に対する基本的な立場を表明していると思われるキリスト教諸教会によって公表された見解、声明、回勅などの中には入手困難なものもあったため、それらの見解を徹底的に把握するためにドイツのキリスト教諸教会に資料送付依頼およびアンケート調査を実施した（平成20年度）。

(2) 平成20年度

ドイツのキリスト教諸教会の基本的な声明の和訳と分析：文献調査終了後、現在まで生命倫理に対して最も基本的な立場と方針を述べる声明である『神はいのちの友：生命の保護に際しての要求と課題』の抄訳を作成した。本研究テーマに関する今後の研究にも不可欠と思われるその和訳に加え、その分析も行った。その際、キリスト教諸教会は生命倫理という新しい問題を解決するためにどのような聖教解釈を行い、死生観や身体観などについて、伝統的キリスト教思想をどのように新たに解釈し直したか、という点を主に検討した。

ドイツ研究調査旅行の実施：D R Z E 研究センター、ミュンヘン大学図書館、バ

イエレン国立図書館、ドイツ・プロテスタント教会宗務局で資料収集を行った。本研究プロジェクトのテーマであるドイツの生命倫理に対するキリスト教の立場に関する資料の中でも、出版されていない資料の収集、つまり日本では入手できない文献・資料も収集できた。また、ドイツ・プロテスタント教会宗務局の担当者から、本研究プロジェクトに関する貴重なご助言を頂いた。

歴史的視点からみたキリスト教諸教会と生命倫理の関係についての研究：ナチズム下での医療倫理上の犯罪が、現代のキリスト教諸教会の生命倫理諸問題に対する態度に大きな影響を残していることから、本研究に歴史的視点を加えた。

(3) 平成21年度

脳死・臓器移植問題に対するキリスト教諸教会の立場の分析：『神はいのちの友』の抄訳で確認できたドイツのキリスト教諸教会の基本的な立場の生命倫理諸問題への応用について、脳死・臓器移植問題を一例に挙げ、文献調査及び分析を行った。

生命倫理論議に関する日独比較宗教研究の試み：脳死・臓器移植問題に対する日本仏教（曹洞宗）の態度表明の独語訳を作成し分析を行った。それによって、この分析結果に比較的視点を加えることができた。というのも、本研究プロジェクトの今後の更なる展開の方向性の一つとして、日本の生命倫理論議にみられる仏教および仏教系宗教団体の立場と役割を明らかにし、それを本研究プロジェクトの成果と照らし合わせる比較宗教的研究が考えられ、それによって、今回のテーマであるドイツにおけるキリスト教的生命

倫理の特徴が、自ずと浮き彫りにされると考
えるからである。

研究成果書の刊行：最後に、本研究
プロジェクトの総括・纏めを行い、研究成果
報告書を刊行した。

4．研究成果

本研究の進行に伴い、新たに発見した問題点
やさらに視野に入れるべき要素が浮上し、研
究開始当初に計画した研究目的および方法に
若干の変更が生じた。それにより、具体的に
は、下記の成果を挙げる事ができた。

(1) 主要文献リストの作成：本研究テーマ
に関して最も基本的と思われるドイツにおけ
る二次資料を纏めて、簡単なコメントを加え
た。

(2) ドイツのキリスト教諸教会の基本的な
声明の抄訳：現在まで生命倫理に対して最も
基本的な立場と方針を述べる声明である『神
はいのちの友：生命の保護に際しての要求と
課題』の抄訳を作成し、発表した。その分析
によって、聖書における「いのち」、またはそ
れに推論される生命に関する基本的な価値観
を明らかにできた。

(3) 歴史的視点からみたキリスト教諸教会
と生命倫理の関係についての研究：ナチズム
下での医療倫理上の犯罪が、現代のキリスト
教諸教会の生命倫理諸問題への態度に大きな
影響を残していることから、「生きるに値しな
い」生命の絶滅というナチズム的プログラム
を、キリスト教的観念と一致させようと試み
たプロテスタント派の神学者ヴォルフガン
グ・シュトローテンケ(Wolfgang Strootenke,

1913-1945)という、日独両国において現在ま
でまだ殆ど研究されたことのない神学者の見
解を分析し、発表した。

(4) 脳死・臓器移植問題に対するキリスト
教諸教会の立場の分析：生命倫理諸問題の中
から、具体的なテーマとして「脳死・臓器移
植」を取り上げ、それに対するドイツ・プロ
テスタント教会の立場を分析し、「脳死・臓器
移植」問題をめぐる論議の中での同教会の役
割についての調査を行った。具体的には、ド
イツ・プロテスタント教会が教会として取っ
た公式見解を検討し、「脳死」というコンセプ
ト、臓器提供、臓器摘出、移植手術を受ける
こと等に関する教会の論証のあり方を分析し
た。移植医療を肯定的に評価するに至るまで
に、いかなる論証が行われ、キリスト教の教
義及び聖書がどのように解釈し直されたのか、
また、それに伴って、プロテスタント教会の
立場が、現在に至るまでにいかに発展してき
たのかという点についても考察した。

(5) 生命倫理論議に関する日独比較宗教研
究の試み：(4)の分析結果に比較的視点を加
え、かつ、本テーマに関して日独両国におけ
る当問題に携わる研究者に新たな視点を提供
しうるという確信の元に、日本仏教(曹洞宗)
の脳死・臓器移植問題に関する態度表明の独
語訳を作成した。

(6) 研究成果書の刊行：最後に、本研究プ
ロジェクトの成果に、研究代表者の本研究テ
ーマに関わる主な論文を加え、それを改訂・
加筆して、研究成果報告書に纏め、国内外の
研究者に提供した。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計3件)

Tobias Bauer、【Übersetzung】
Stellungnahme der Sötö-Schule zum
Problem von Hirntod und
Organtransplantation (1999)、先端倫理
研究、査読有、5巻、2010、18-67

Tobias Bauer、Die Position der
evangelischen Kirche in Deutschland
(EKD) zum Problem von Hirntod und
Organtransplantation、熊本大学社会文
化研究、査読有、8巻、2010、23-40

バウアー・トビアス、翻訳：『神はいのち
の友：生命の保護に際しての要求と課題』、
文学部論叢、査読無、100巻、2009、145-158

[図書](計3件)

Tobias Bauer、熊本大学、ドイツの生命
倫理論議にみられるキリスト教ならびに
同教会の果たす役割に関する研究：研究
成果報告書、2010、139

高橋隆雄・糸和彦(編)、九州大学出版会、
生命という価値 その本質を問う、2009、
42-61 [トビアス・バウアー、ナチ時代
における「生きるに値しない」生命の抹殺
政策とキリスト教：W. シュトロローテン
ケのプロテスタント的生命倫理論]

高橋隆雄・八幡英幸(編)、九州大学出版
会、自己決定のゆくえ 哲学・法学・医
学の現場から、2008、292-311 [トビアス・
バウアー、ドイツの医療倫理と自己決
定：ドイツにおける臨死介助議論を中心
に]

[その他]

研究成果報告書『ドイツの生命倫理論議
にみられるキリスト教ならびに同教会の

果たす役割に関する研究』：
<http://hdl.handle.net/2298/14609>

トビアス・バウアー、「脳死・臓器移植」
に対するドイツ福音教会(EKD)の立場、
熊本大学学術リポジトリ、2010、18：
<http://hdl.handle.net/2298/14469>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

バウアー トビアス (BAUER TOBIAS)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：30398185